News Release　Takashimaya

2021 年 8 月

高島屋創業190周年

建築家・坂倉準三と高島屋の戦後復興
―「輝く都市」をめざして―

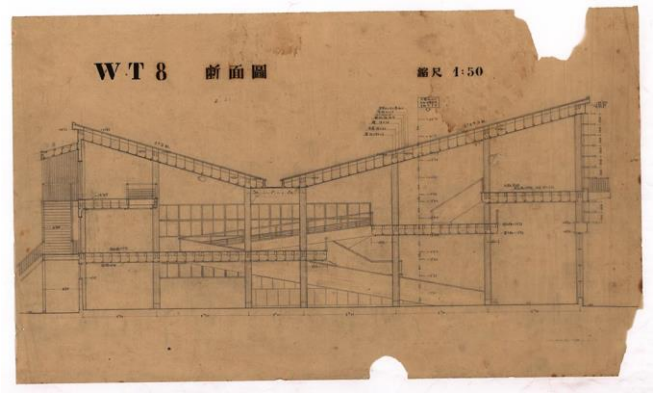
■会期　2021年9月15日（水）～2022年2月13日（日）　11時～19時
休館日：月・火曜日・年末年始<12月27日（月）～2022年1月4日（火）>
■会場　日本橋高島屋 S.C. 本館4階　高島屋史料館 TOKYO　■入館無料
■監修者　松隈洋（建築史家・京都工芸繊維大学教授）
※2021年12月に松隈氏による講演会の開催を予定しております。詳細は当館 HP をご覧ください。

日本の高度経済成長期に呼応し、神奈川県立近代美術館、新宿駅西口広場など数々の建築物を手掛けた坂倉準三（1901-1969）だが、高島屋の戦後復興と関わりがあったことはあまり知られていない。1929年に渡仏した坂倉は、モダニズム建築史上最も重要な建築家の一人であるル・コルビュジエに学び、1937年に開催されたパリ万国博覧会で「日本館」を設計。そして「日本館」に出品していた高島屋と出会い、1948年には「高島屋和歌山支店」、1950年には「高島屋大阪難波新館改増築（ニューブロードフロア）」の仕事で大成功をおさめ、1957年の「南海会館」の設計へとつながっていく。高島屋での仕事を通じて、戦後の高度経済成長と大衆消費社会に向かう中、坂倉は都市への人口集中、交通の混雑、商業施設の大型化等、複雑化する機能をはじめ、諸条件をどこまでも合理的に解決することに挑んだ。

本展では、坂倉と高島屋の仕事が、のちに彼が取り組んだ都市デザインの代表作といわれる渋谷「東急会館」（1954）や「新宿西口広場・地下駐車場」（1966）へと接続し、坂倉の都市デザインの礎をつくったこと、また、坂倉が高島屋と協働し、多くの人々が集まる百貨店という公共空間をどのように快適で美しい空間へと創造してきたか紹介する。

坂倉準三とル・コルビュジエ(1955 年)、文化庁国立近現代建築資料館所蔵

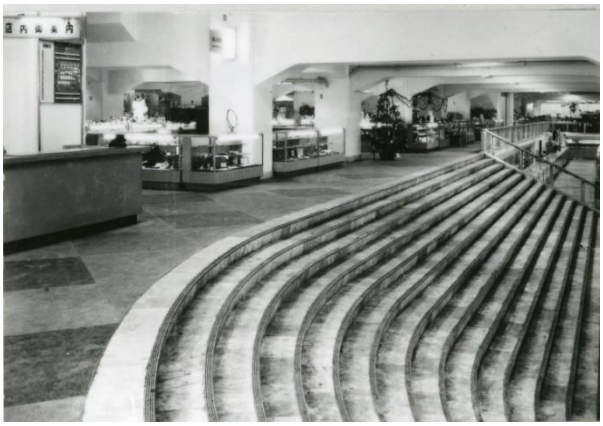
高島屋和歌山支店



高島屋和歌山支店断面図（1/50）、文化庁国立近現代建築資料館所蔵

戦後間もない1948年には、坂倉と高島屋との初めての仕事として、高島屋和歌山支店を竣工。まさしく戦後の苦難を乗り越えて設計された木造建築で、延べ 1,300 ㎡ほどの小規模な百貨店ながらも、バタフライ屋根とその下に広がるスロープ空間が、都市的な視点から発想されており、調和のとれた近代的な百貨店空間を印象づけるものになっている。

高島屋大阪難波新館改増築（ニューブロードフロア）


高島屋大阪難波新館改増築（1950 年）

1950年には、坂倉が初めて取り組んだ交通空間と商業施設の複合建築として高島屋大阪難波新館改増築（ニューブロードフロア）を竣工。延床面積が1万㎡を超え、南海難波駅の高架下を高島屋の売場に改築するという困難な仕事にあったにもかかわらず、坂倉は大変な熱意をもって、70日間の突貫工事で実現した。

坂倉と高島屋の関わりは建築に留まらない。シャルロット・ペリアンとの交流を通して、1941年には日本橋高島屋で「ペリアン女史日本創作展覧会　2601年住宅内部装備への一示唆　選擇・伝統・創造」展を、1955年には「巴里1955年―芸術の綜合への提案―コルビュジエ、レジェ、ペリアン3人展」が開催されるに至った。

「ル・コルビュジエ、レジェ、ペリアン3人展」図録（1955 年）

建築から都市デザインへ

新宿西口広場（1966 年）文化庁国立近現代建築資料館所蔵

大阪の「高島屋大阪難波新館改増築」（1950）を手始めに、その継続である「南海会館」（1957）、そして東京の「東急会館」（1954）、「新宿西口広場・地下駐車場」（1966）へと発展していく。

いずれにおいても坂倉は、多くの人が日々利用する公共空間である駅とその周辺を、人間にとって快適なものをめざしてデザインした。